



小山・小山ヶ丘地区

“ 古代～中世の仏像 歴史伝える ”

小山は、平安後期から室町時代までの仏像が遺されている市内唯一の地区です。平安後期の観世音菩薩立像（福生寺）、南北朝時代の釈迦如来坐像（宝泉寺）、室町時代の不動明王像（中村不動尊）が存在します。もし明治維新での廃仏毀釈で行方不明となってしまった鎌倉時代の阿弥陀像（正明院／廃寺）が残されていたれば、古代～中世の各時代で造られた仏像が揃っているという稀有な土地になっていたことでしょう。



福生寺の観世音菩薩立像（町田市立博物館所蔵写真）

A 三ツ目 みつめ

道の分かれ目ともいわれていますが、地元の人でも「三ツ目」の正確な由来については分からないようです。地形的に見ると、境川と北側の丘陵地との間に挟まれ、境川が氾濫するとすぐに辺り一面が水びたしになることから、「みつ」（満る）に「め」（場所）のみつめと称し、その危険性を伝えるために生まれた地名とも考えられます。



「三ツ目」バス停

C 片所 かたそ

地形から見ると、「かたそ」の地名の由来は「かた」（傾）・「そ」（岨→崖）とされ、急傾斜の崖の多い土地であることを意味しています。片所の地には、春にはホシザクラが可憐な花を付け、夏にはホタルの舞う谷戸が今も残されています。餌をついばみに来るキジの姿も時折見られます。



片所地区

B 田端 たばた

「たばた」という地名は各地でみられ、「田の傍ら」「田んぼの端」と推測されますが、台地の崖線近くに広がっていることから「台地の端」という意味も考えられます。ストーンサークルで知られる「環状積石遺構」もそうした場所に造られています。



縄文時代「田端環状積石遺構」のレプリカ展示

※明治新政府の神仏分離令（1868年）により起こった仏教の排斥運動



相原地区

“ 古代の面影に彩られたロマンの地 ”

相原とその周辺地域には、高良谷、秦良谷、春日谷といった渡来系・畿内系を思わせる地名がみられます。また、ひっそりとたたずむ未発掘の横穴墓が数多く点在し、古墳時代の安閑天皇を祀った蔵王社、相模国分寺の瓦を焼いた窯跡が出土するなど、古代の面影を伝えていきます。丘陵や諸社が同じ線上に並ぶ軸線が見られるとの説もあり、歴史的背景を知って歩く相原の地は、古代へのロマンをかきたててくれます。



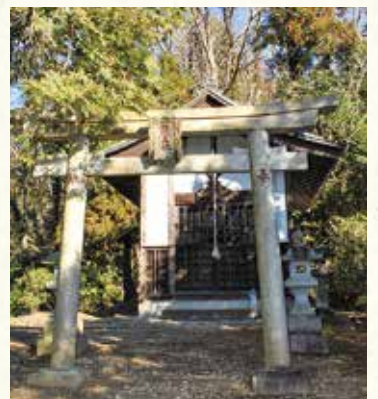
安閑天皇を祀る蔵王社



鐘楼門のある大戸観音堂

A 大戸 おおと

地形的には山間の入り口を「おおと」と称し、全国各地に見られる地名です。その昔、鎌倉街道と甲州道へ通じる要衝だったため、大木戸番所の備えがあり、地元では大木戸を大戸と呼び、それが地名になったと伝えられています。



C 蚕種石谷戸 こだねいしやと

国道16号沿いの坂下付近は「蚕種石谷戸」と呼ばれていました。養蚕が盛んだった頃に地元農家の人たちが「蚕の神様」として繭の形をした蚕種石を祀っていたことに由来しています。この石は八十八夜が近づくと緑色に変わり、ふ化した蚕を蚕座に移すように知らせたと言います。養蚕業の衰退後は長らく忘れられていましたが、昭和40（1965）年に地元住民の手で掘り出され、現在は諏訪神社の境外地に祀られています。



繭の形をした蚕種石

B 真米 まごめ

「まごめ」も各地に見られる地名で、馬との関連を想起させる馬籠や馬込、急峻な地形を形容した間込など、さまざまに表記されています。相原の場合は、明治時代までの史料には馬込とあるものの、他地域との意地の張り合いから「境川の水の米より、谷戸の真清水で作るわしらの米の方がずっと旨いのだ」と主張して「馬込」を「真米」に変えたといわれています。



崖地を貫く真米トンネル